九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 若年無業者の相互作用的な語りにおけるコミュニケーションの構造と支援モデル

森本, 文子
九州大学大学院人間環境学府・日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/25152

出版情報：九州大学心理学研究. 13, pp.137-145, 2012-03-30. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2012, Vol.13, 137-145

# 若年無業者の相互作用的な語りにおけるコミュニケーションの構造と支援モデル

森本　文子　九州大学大学院人間環境学府・日本学術振興会特別研究員

**The structure and support model of communications of Not in Education, Employment or Training (NEET) by the interactive narratives.**

Fumiko Morimoto (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*; *Reseach Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science*)

The aims of this study were (1) to clarify the structure of communications of Not in Education, Employment or Training (NEET), and (2) to consider the communication support model to NEET, focusing on the interactive narratives between the narrator and the listener in the interview survey with NEET. The Semi-structured interviews were conducted for 10 NEET participants, and the narrative data were processed based on qualitative analyses. The analysis found that the structure of NEET's communication could be divided into the following 3 main categories : "reception and sending between two people", "inconsistency ・ inaccurate of narrative", and "recognition to others" . The result mentioned the unbalance of the original NEET's communication, and the model of the communication support for NEET was suggested.

**Key Words**: Not in Education, Employment or Training (NEET), communications, narrative

## I　問題と目的

若年無業者，すなわちニートは，元はイギリスの若者政策で使われていた Not in Education, Employment or Training（以下 NEET と略記）という言葉である。イギリスの内閣府社会的排除防止局が作成した調査報告書（Social Exclusion Unit, 1999）では，イギリスにおける NEET の定義は「16～18 歳の教育機関に所属せず，雇用されておらず，職業訓練に参加していない者」とされ，多くは貧困や複雑な家庭背景をもち，学業不振や学校でのいじめを経験しており，そのような若者の受けうる訓練は限定的で，その後も失業状態に陥ることが多いと指摘されている。日本のニートについて，本田ら（2006）は，本来の定義を離れてあらゆる「駄目なもの」を象徴する言葉として蔓延して，何らかの意味で「病んだ」状態にあるために仕事に向かって踏み出せない若者，というイメージが与えられていると指摘している。本田・堀田（2006）は，ニートという言葉には否定的なイメージが強固に随伴している現状を鑑みて，代わりに若年無業者という言葉を用いている。本稿においても本田・堀田に倣い，ニートを若年無業者と呼ぶ。日本の若年無業者数は 2006 年度で 62 万人（厚生労働省，2007a）とされるが，この中には幅広い状態が含まれている。小杉（2003）によると，若年無業者とは，「15～34 歳の非労働力（仕事をしていないし，また，失業者として求職活動をしていない）のうち，主に通学でも，主に家事でもない者」と定義される。この定義の場合，高校卒業前の年齢を含むため社会経験の少なさや学歴の低さといった就業に不利になる要因を孕む。

玄田・曲沼（2004）は，若年無業者を「社会的ひきこもりも含むが，それよりもっとさまざまな状況にあって，就職活動の前段階で立ちどまってしまった人たち」とし，社会的ひきこもりを含むがより広い対象を想定している。社会的ひきこもりとは，斉藤（1998）によると，"20 代後半までに問題化し，6 ヶ月以上自宅にひきこもって社会参加しない状態が持続しており，ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの" と定義される。また，厚生労働省（2003）では，社会的ひきこもりの基準を，自宅を中心とした生活であり，就学・就労といった社会参加活動ができないあるいはしていない者で，この状態が 6 ヶ月以上続いている者とし，統合失調症などの精神病圏の疾患，中等度以上の精神遅滞（IQ55-50）をもつ者，就学・就労はしていなくても，家族以外の他者（友人など）と親密な人間関係が維持されている者は除くとしている。厚生労働省（2007b）の若年無業者調査によると，不登校経験者が 37.1%，ひきこもり経験者が 49.5%，精神科または心療内科での治療を受けた経験のある者が 49.5%であることを明らかにしている。この中には精神神経疾患や発達障害などの器質的な障害を抱えている若者も含まれる可能性があり，若年無業者には，就労支援だけでなく，医学的治療や心理的支援が必要である可能性は高い。また，社会的ひきこもりと明確に異なる

無業者とは，おそらく少し前までは，非正規労働者や失業者や就業者であり，そして少し先にはまた，非正規労働者や就業者に戻っている，きわめて動態的な存在ではないかと推測される（居神ら，2005）。日本の若年無業者は，年齢層や貧しい家庭だけでなく裕福な家庭までを含むなど，イギリスのNEETとは異なっているにもかかわらず，日本の若年無業者独自の特徴や困難さはほとんど明らかにされていない。

内閣府（2005）の若年無業者を対象とした実態調査結果から，無業期間が2年以上と長い場合では75.6%が就業を希望していなかったり，求職をしていないため長期化や深刻化が予想されるが，無業期間が6ヶ月未満と短い場合では求職する者がその約三分の一であり，比較的非正規労働者に近く，非正規労働者と循環していく可能性が考えられる。無業期間が6ヶ月以上である者は，就業への困難さが特に深刻であることが推察される。そこで，本研究では，内閣府（2005）の調査結果を踏まえ，小杉（2003）や玄田・曲沼（2004）の先行研究の若年無業者の定義と，斉藤（1998）や厚生労働省（2003）の社会的ひきこもりの定義などを参考に，若年無業者を「18～34歳の非労働力（仕事をしていないし，また，失業者として求職活動をしていない）のうち，主に通学でも，主に家事でもない者。この状態が6ヶ月以上継続している者」と定義する。

若年無業者の特徴の一つとして，コミュニケーションの困難さが指摘されている。白井（2005）は若年無業者といった青年の問題から人と関わることへの苦手意識が見られると述べている。若年無業者は青年期，あるいは青年期の延長上にいる。青年期は「第二の分離—個体化過程」（Blos，1967）と言われ，児童期までの家庭を中心とした小さな人間関係から，より広く他者との関係を構築していく時期である。Coleman & Hendry（1999/2003）によると，青年は幅広い社会的ネットワークに埋め込まれており，そのネットワーク内に含まれる関係の多様さを指摘しており，両親，友人，教師といった他者との関係が青年期の発達を押し進める原動力の1つとされるが，若年無業者の多くがソーシャルネットワークの「孤立型」と「限定型」を占めている（堀，2004）という指摘がある。沖田（2004）は，ソーシャル・ネットワークの縮小化は，社会的発達機会を減少させ，自信を失わせたり現在の状況に対するやる気を失わせて不活性化に結びつき，これが求職活動をさらに困難にする要素となるという悪循環を指摘している。若年無業者は他者との関係が少なく，関係が狭いためにコミュニケーションが苦手なままである可能性があるだろう。若年無業者に一般的に就労に必要と思われる基礎的スキルについて尋ねた結果，64.4%が「人に話すのが不得意」と回答しており，コミュニケーションの苦手意識が示されている（厚生労働省，2007b）。また，元若年無業者28名を対象としたヒアリング調査によると，面接者らが共通して元若年無業者の臨床的印象や見立てとして，「希薄な対人関係」を挙げている（厚生労働省，2007b）。しかしながら，若年無業者のコミュニケーションについては実証的な研究が少ない上，どのようにコミュニケーションが困難であるのかについてはほとんど明らかにされてきていない。

Young（1987）は語りを，語られる出来事にかかわる部分である「taleworld」と，出来事と直接はかかわりなく，聞き手を意識して発せられた部分である「storyrealm」の2つに分類している。語りは，語り手と聞き手との間の共同生成性や即興性の要因を必然的に伴い，相互作用的な側面がある（Cohler & Cole，1996）。相互作用性は語り手側の聞き手への意識だけではなく，共同生成の担い手として語り手側の発話や応答などにも着目することが必要と思われ，これらに着目することでどのようにコミュニケーションが困難であるのか，その構造について明らかにできるのではないだろうか。

以上のことから，本研究では，若年無業者との面接調査における語り手と聞き手との相互作用的な語りを質的に分析し，①コミュニケーションの構造を明らかにすること，②その構造を踏まえて，若年無業者のコミュニケーションの支援モデルの提案を試みることを目的とする。

## Ⅱ 方 法

1. 参与者：若年無業者，あるいは現在18歳～34歳以下の若年無業経験者。就労相談機関などに研究概要の記載された募集要項を配布し募集を行った。男性9名，女性1名の計10名を対象とした。平均年齢28.50歳（*SD*＝4.97）。参与者の情報をTable 1に示す。

2. 手続き：2008年11月～12月に半構造化面接を実施した。面接時の最初に10分ほど面接の目的と意義，調査内容，個人情報の取り扱いやプライバシー保護について文書にそって口頭で説明を行った上で，同意書に署名をしてもらった。次に，10分ほどアンケートに回答してもらった後，約40分～2時間の面接を行った。面接内容は参与者の同意を得てICレコーダーで録音した。面接後，この録音を聞きトランスクリプトに逐語的に転記した。

3. アンケート内容：参与者の属性や経歴を尋ねる項目：性別，年齢，最終学歴，現在の状態（無業あるいは働いている場合勤務頻度と時間），現在の状態の継続期間，就労経験の有無を尋ねた。

4. インタビュー内容：①現在に至るまでの就業や就学

**Table 1**
**参与者の情報**

| | 性別 | 年齢 | 学歴 | 現在の状態とその期間 | 最長の無業経験 | 雇用経験の有無（有は最長期間） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 男性 | 20代 | 専門学校中退 | 無職：8〜9ヶ月 | 8〜9ヶ月 | なし |
| B | 男性 | 20代 | 中学卒業 | 無職：約6年 | 約6年 | なし |
| C | 男性 | 20代 | 高校中退 | 無職：約9ヶ月 | 約2年 | アルバイト半年 |
| D | 男性 | 30代 | 大学中退 | 無職：約5年 | 約5年 | なし |
| E | 男性 | 30代 | 大学卒業 | 無職：約7年 | 約7年 | なし |
| f | 女性 | 30代 | 短大中退 | 無職：約2年 | 約2年 | アルバイト5〜6年。正社員経験もあり |
| G | 男性 | 30代 | 大学卒業 | 月に8〜10日ボランティア：4ヶ月 | 約4年 | アルバイト3年 |
| H | 男性 | 30代 | 大学卒業 | 週に3〜4日ボランティア：3ヶ月 | 約3年 | アルバイト約3ヶ月 |
| I | 男性 | 30代 | 大学卒業 | 週に3日仕分けアルバイト：6ヶ月 | 約1年半 | 正社員約7年半 |
| J | 男性 | 30代 | 高校中退後大検取得 | 無職：約10年 | 約10年 | アルバイト3〜4年 |

を中心としたライフストーリーについて，②大事に思う人との関係について尋ねた。研究目的から，語りの流れを重視してなるべく自由に話してもらうようにした。

5. **倫理的配慮**：参与者には，面接前に途中で面接をやめても不利益は全くないことを十分説明した。面接後日，筆者が面接内容を理解してまとめたレビューシートを郵送し，筆者の理解が誤っていないかを確認した。レビューシートは，A4用紙1枚に参与者のプロフィールと時系列に並べたライフストーリー，大事に思う人との関係について筆者がまとめ，臨床心理士のチェックを受けた上で郵送した。

6. **分析の手続き**：参与者の語りから作成したトランスクリプトをデータとし，語りの構造について質的分析を行った先行研究（Habermas & Bluck, 2000；野村, 2002, 2005, 2006など）を参考にした。先行研究の理論的枠組みに依拠したトップダウン的な視点はありながらも，事前に決められたものではなく，得られた語りを出発点とし，若年無業者の語りの構造や特徴を見出すためにボトムアップの方向性からカテゴリを生成した。参与者に特徴的であった語りの構造のカテゴリ生成を試みた。Step1〜3からなり，得られたトランスクリプトを出発点とし，順次ボトムアップに下位概念のカテゴリーから生成して，上位概念のカテゴリーに集約していくという構成であった。

(1)Step1＝特徴的な語りの抽出：トランスクリプトから参与者に共通的な特徴と思われる語りについて，筆者と臨床心理学を専攻とする大学院生1名とで，会話の文脈や語りの特徴を損なわないようにデータの切片化などはせずに抽出した。その際，その語りの文脈を損なわないように，必要があれば語りの前後の会話も含めて抽出した。参与者2人以上に共通する特徴的な語りを基準として抽出した。抽出した語りは，松嶋（2001）を参考に，エピソード，すなわち語りの最小の文脈を1つの単位としてカウントすることとした。

(2)Step2＝下位カテゴリーの生成：Step1で抽出したエピソードからサブカテゴリを生成した。サブカテゴリの生成やエピソードの選定については筆者と臨床心理学を専攻とする大学院生1名との協議の上で生成した。基準はエピソード数の合計が10以上とし，10のサブカテゴリを生成した。

(3)Step3＝上位カテゴリーの生成：筆者と臨床心理学を専攻とする大学院生1名との協議の上で，下位カテゴリーから共通特性を見出し3つのメインカテゴリを生成した。

## Ⅲ 結　果

以下，本文および表中，メインカテゴリを＜＞で，サブカテゴリを「」，参与者である語り手の発言を“”およびイタリック斜体，面接者である聞き手の発言を《》およびイタリック斜体，面接者による補足を（）で表記する。メインカテゴリとサブカテゴリをFig.1に示す。若年無業者の相互作用的な語りから分析カテゴリーの生成を試みた結果，全体を通じて，対象としたエピソード数は203，3のメインカテゴリと10のサブカテゴリを生成した。若年無業者のコミュニケーションは，大きく分

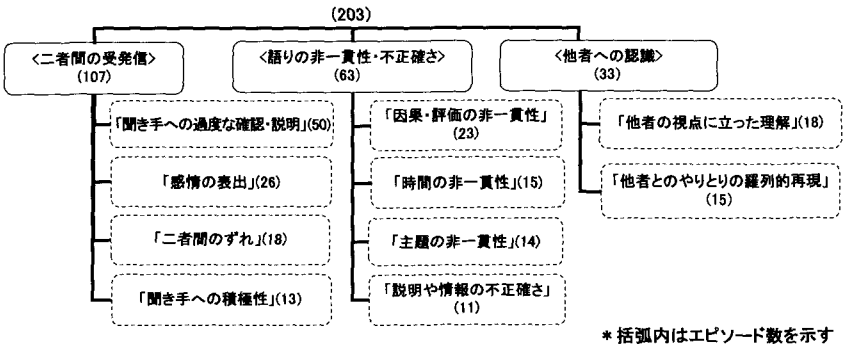


**Fig.1** 若年無業者の語りの分析カテゴリー

けて，＜二者間の受発信＞，＜語りの非一貫性・不正確さ＞，＜他者への認識＞の3つの構造からなることが明らかになった。

### 1. ＜二者間の受発信＞

聞き手と語り手との間の円滑またはずれた受信・発信からなる＜二者間の受発信＞（合計エピソード数107）メインカテゴリを生成した。＜二者間の受発信＞は，「聞き手への過剰な確認・説明」「感情の表出」「二者間のずれ」，「聞き手への積極性」の4つのサブカテゴリから構成された。サブカテゴリごとの語り例をTable 2に示す。

(1)「聞き手への過剰な確認・説明」

疑問形の口調で聞き手に同意を求めたり，自分の発言の正しさを確認したり，聞き手に話の内容についてやや過剰に説明加えた語りに基づいてサブカテゴリを生成した。10のサブカテゴリのうちエピソード数が50と一番多くみられた。このサブカテゴリに関する語りがみられなかったのは2名であった。例えば，“～じゃないですか（f）”とすぐに疑問形で同意を求めながら話を進める様子があった。また，チャットについて“ネットでしゃべるやつ（D）”など，やや一般常識的な話についてもやや過剰に丁寧な説明をしていた。

(2)「感情の表出」

過去の経験に関してや，今ここでの語り手と聞き手の間の中で生じた感情が現れた語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられなかったのが1名であった。例えば，過去の経験に関して，“*恥ずかしい，情けない*（B）”と感情を表したり，今ここでの場で感じた“*恥ずかしい*（J）”などの感情の表出がみられた。また，過去の経験を語るうちにその当時の腹立たしさを思い出してインタビュー中に興奮して感情をコントロールできない様子も語られた。

(3)「話し手と聞き手とのずれ」

話し手の意図と聞き手の理解にずれが生じたり，話の流れが話し手と聞き手の二者間でずれがみられた語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは7名，みられなかったのは3名であった。例えば，人事の威張っている対応についてインターネットの掲示板で“めちゃくちゃひどいことす

**Table 2**
＜二者間の受発信＞のサブカテゴリごとの語り例

| メインカテゴリ | サブカテゴリ | 語り例 |
|---|---|---|
| ＜二者間の受発信＞ | 「聞き手への過度な確認・説明」（*Me* = 5.00, *SD* = 3.62） | “*やばりそういう時って話したいじゃないですか？*”≪はい≫“話してスッキリとか”（f）<br>“チャットかなんかで”≪はい≫“今は流行っているか知りませんけど，ネットでしゃべるやつですね”（D） |
| | 「感情の表出」（*Me* = 2.60, *SD* = 1.65） | “（学校でからかわれているのを親に言うのは）*恥ずかしいというか自分が情けなくて，なんか*”（B）<br>“*いやーなんか恥ずかしい話なんか，喫茶店とかもいいなとか*”≪*恥ずかしくないですよ全然*≫“いやー”（J） |
| | 「二者間のずれ」（*Me* = 1.80, *SD* = 2.39） | “*掲示版でめちゃくちゃひどいことすごいこと書いてますよ*（中略）”≪*少しインターネットの掲示版とか書き込んだりとか，やり取りをすることでちょっとイラついているのもおさまるとか*≫“*イラついたりはあんまりしないんですけど*”（E）<br>≪*本当の自分を出してしまったらいけないように感じて？*≫“*そういうのも，高校時代はありましたよね*”≪*失敗するのがちょっとこわいとか。うまくやれる自信がないとかそういった感じですかね*≫“*そういうのも，ありますよね*”（I） |
| | 「聞き手への積極性」（*Me* = 1.30, *SD* = 1.57） | “*何人ぐらい面談されたんですか*”≪*1ケタくらいですね*≫“*はぁー，そうですか。大変ですね*”（B）<br>“*なんか自分むしろこういうのはわかってもらいたいというのがあって。協力したいっていうか*”（J） |

*ごいこと書いていますよ*”と言ったので，聞き手はイライラを掲示版で吐き出しているのだと思って，書き込むことでイラついているのも少しはおさまるか尋ねると“*イラついたりはあんまりしないんですけど*（E）”とずれたり，聞き手が語り手の内容を踏まえて《*そういった感じですかね*》という確認に対して，“*そういうのも，ありますよね*（I）”と的外れではないがいまひとつしっくりこない様子，など語り手と聞き手とで話が噛み合わない語りがみられた。

(4)「聞き手への積極性」

聞き手からの回答を期待した質問や，語り手自ら積極的に話した語り，聞き手に対して理解してもらおうとする語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリーに関する語りがみられたのは6名，みられなかったのは4名であった。例えば“*何人ぐらい面接されたんですか*（B）”など聞き手からの回答を期待した質問や，“*わかってもらいたいというのがあって，協力したいっていうか*（J）”などの聞き手へ理解してもらうための積極的な語りがみられた。

2.＜語りの非一貫性・不正確さ＞

話の内容が語るうちに揺らいだり，情報が曖昧なため聞き手がわかりにくい語りを＜語りの非一貫性・不正確さ＞（合計エピソード数63）メインカテゴリを生成した。＜語りの非一貫性・不正確さ＞は，「因果・評価の非一貫性」，「時間の非一貫性」，「主題の非一貫性」，「説明や情報の不正確さ」の4つのサブカテゴリから構成された。サブカテゴリごとの語り例をTable 3に示す。

(1)「因果・評価の非一貫性」

出来事の原因などの理由が語る中で変化したり，他者に対する評価が揺らいだり，相反する二つの気持ちの間での葛藤がみられた語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは8名，みられなかったのは2名であった。例えば，“*ひきこもり状態で*”と語った後に“*自分からしたらひきこもりって感じじゃなかったんですけども*（G）”と言いなおすなど前述べた状態に対する評価を否定する語りがみられた。また，本当はわかって欲しいが人前では押さえないといけない（I）など，二つの気持ちの間で葛藤がみられる語りもあった。

(2)「時間の非一貫性」

いつの時期か，どのぐらいの期間かが曖昧であったり，過去の話であったのに急に現在の話に変わるなど話の時間軸が急変した語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは7名，みられなかったのは3名であった。例えば，アルバイトしていた期間のあいまいさ（f），高校時代の話から中学校の話へ流れ，急に現在の自分の状態について語る（H）といった時間軸が急に変わる時間軸の急転に関する語りがあった。

(3)「主題の非一貫性」

ある主題から逸れて別の主題になったり，主題にある程度のまとまりや結論が聞き手と共有される前にその話が一方的に終了した語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは3名，みられなかったのは7名であった。例えば，Aは，祖母がほぼ家にいるという話から年寄りを狙う詐欺師，自分も騙されないようにしようという話に移っていった。Iは，聞き手からの《*正社員時代の業務はどうであったか*》という質問に対し，はじめは大学でアルバイトをそ

**Table 3**
＜語りの非一貫性・不正確さ＞のサブカテゴリごとの語り例

| メインカテゴリ | サブカテゴリ | 語り例 |
|---|---|---|
| 〈語りの非一貫性・不正確さ〉 | 「因果・評価の非一貫性」（*Me* = 2.30, *SD* = 2.95） | “*一時ここに来る前ひきこもり状態で。何もやる気がなかったので，でそれを親がちょっと心配して*”≪*ひきこもり状態はどれぐらいだったですか*≫“*自分からしてみたらひきこもりって感じじゃなかったんですけども*”（G）<br>“*本当はわかってほしいとか自分の思いを伝えたいんですけど*（中略）*本当はそういう欲求があるのにそれを人前では押さえないといけない*”（I） |
| | 「時間の非一貫性」（*Me* = 1.50, *SD* = 1.65） | ≪*アルバイトの期間を含めてどれぐらいされていましたか*≫“*えーと1年，いや，8か月ぐらいですかね？うーん*”（f）<br>“*高校時代は楽しくなかった。中学までがどっちかっていうとのびのびと，今思うとその中学の頃ぐらいまでの自分の感じがでてきたなって*”（H） |
| | 「主題の非一貫性」（*Me* = 1.40, *SD* = 2.46） | “*（おばあちゃんは）やさしいです。たしか年寄りをねらう詐欺師もいますから*”≪*詐欺に？*≫“*いや，あってないですけど，高齢者は詐欺に気をつけなくちゃいけない。自分も騙されないように気をつけなくちゃ*”（A）<br>≪*（正社員だったころ）業務はどうでしたか？*≫“*最初に大学中にアルバイトそこ選んだのも*（中略）*コミュニケーション能力があまりないといいますか。自分はうまくやれないなってコンプレックスとして思ってたんで*”（I） |
| | 「説明や情報の不正確さ」（*Me* = 1.10, *SD* = 0.99） | “*漠然としたイメージからくる学部を選ぶのか，それとも堅く文系の就職，その時はまだ銀行に行くっていうビジョンがあったみたいですね*”≪*銀行に就職を考えていた？*≫“*いや，自身はなかったんですけど，周りがですね*”（H）<br>“*あー，なんか市役所か病院かわからないんですけど*”（B） |

こでえらんだ話から自分はコミュニケーション能力が人より劣っているという話に流れ，業務の話には戻らなかった。

(4)「説明や情報の不正確さ」

出来事に関する説明が不足，あるいはわかりにくかったり，情報が不正確な語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは8名，みられなかったのは2名であった。例えば，Hは，高校の進路選択で「*銀行に行くっていうビジョンがあったみたいですね*」と自分の過去のビジョンを語っているように聞こえたが，それは結局「*自身はなかったんですけど，周りが*」とわかりにくい説明がみられた。また，市役所か病院かわからない（B）などからは情報の不正確さがみられた。

3. ＜他者への認識＞

語りの中での登場人物である他者の視点に立って語ったり，登場人物である他者とのやり取りを聞き手に対して羅列的に再現した語りを＜他者への認識＞（合計エピソード数33）メインカテゴリとした。＜他者への認識＞は，「他者の視点に立った他者理解」，「他者とのやりとりの羅列的再現」の2つのサブカテゴリから構成された。サブカテゴリごとの語り例をTable 4に示す。

(1)「他者の視点に立った他者理解」

語りの中の登場人物の視点からその人の考えや感情，状態などを語った語りに基づいてサブカテゴリを生成した。この下位カテゴリーに関する語りがみられたのは5名，みられなかったのは5名であった。例えば，弟の辛い状態を心配からくる思いやり（C）や，父親の自分勝手な性格から父親がどう思っているかの推測（I）が語られた。

(2)「他者とのやりとりの羅列的再現」

語りの中の登場人物との会話のやりとりが再現された語りに基づいてサブカテゴリを生成した。このサブカテゴリに関する語りがみられたのは4名，みられなかったのは6名であった。例えば，「*職場の前体験だからそういうもんだよって言われて。そう言われてみてそうだなーみたいな*（D）」など羅列的に並べて語り，誰と誰のやりとりであるかや会話内容は理解できるが，まるで自分の体験ではないように客観的で，まるでチャットでのやりとりのように語られていた。

## Ⅳ 考　察

### 1. 若年無業者のコミュニケーションの構造

語り手と聞き手との相互作用的な語りを質的に分析した結果から，若年無業者はコミュニケーションが苦手である（堀，2004；厚生労働省，2007b；白井，2005など）というよりも，そのコミュニケーションの構造にはアンバランスさがあることが考えられた。確かに，ぎこちなくて違和感を感じるコミュニケーションはあるが，円滑にコミュニケーションできる部分もある。このコミュニケーションがアンバランスであるということが，若年無業者が社会的ひきこもりも含む（玄田・曲沼，2004）というこれまでの見方とは異なり，若年無業者独自の特徴ではないだろうか。このコミュニケーションのアンバランスさゆえ，若年無業者は周囲からはできるのに怠けているように見えてしまい，“日本の若年無業者は「働く意欲のない青年」と解されてしまう”（小杉，2005）のではないだろうか。

円滑にコミュニケーションできる特徴としては，聞き手を意識した語りや，積極性がみられたり，感情を豊かに表出した語りがみられた。このことからは，人とのつながりを求めたり，理解してもらいたいという気持ちが読み取れた。若年無業者が人と接することに苦手意識があるという指摘（堀，2004；厚生労働省，2007b；白井，2005など）があるものの，人と接することが苦手であっても人とのつながりを求めている者も多い可能性が考えられた。また，斎藤（2007）は対人関係があればニート，ないものがひきこもりと述べており，他者の視点に立ってその人の考えや状態を語る様子からは，若年無業者には社会性が感じられる部分があった。

**Table 4**
＜他者への認知＞のサブカテゴリごとの語り例

| メインカテゴリ | サブカテゴリ | 語　り　例 |
|---|---|---|
| 〈他者への認識〉 | 「他者の視点にたった理解」（*Me* = 1.80, *SD* = 2.62） | “(弟が) *あんまりいい講師に恵まれなかったみたいで，人間的にあれだった人が多かったから，さんざん振り回されたらしい*”（C）<br>“*父親の場合は自分から率先して周りに自分のことをわかってもらおうと努力しなくても，自分勝手に向こうから言って来てくれるって言う考えの持ち主だと思うんですよね。多分，家庭の中でもトップでありたいと思っていると思う*”（I） |
| | 「他者とのやりとりの羅列的再現」（*Me* = 1.50, *SD* = 3.10） | “*今日も先生にやりがいとかがあんまりないんですよねって言ったんですよ。職場の前体験だからそういうもんだよって言われて。そう言われてみてそうだなーみたいな*”（D）<br>“(親が) *パソコン教えるのはいいんじゃないのかなーっていうことを言われたんで。ああって思って。パソコンっていったら事務系なんですけど，女性の人が多いと言うことを聞いて。ああそうですよねって*”（G） |

ぎこちなくて違和感を感じるコミュニケーションの特徴としては，自信がないため自分の語りを聞き手に過度に確認するために話がなかなかすすまない様子や，語り手と聞き手との二者間で話の内容理解がずれてしまうことがみられた。人と接することに慣れていないために，会話がぎこちなかったり，話のずれを修正できないことが推察された。また，語っているうちにある出来事の理由や評価，時間や話の主題が揺らいだり，変わっていくといった話に一貫性のないことがコミュニケーションの特徴として見出された。出来事は因果的な結びつきが欠けたまま羅列されればそこに意味を見出すことが困難になる（Krantz, 1998）。また，時系列は語りの基本的属性である（Bruner, 1990/1999）。因果や時系列が一貫していない語りは，語り手の一方的な話となってしまい，若年無業者が出来事を自身の世界の中で捉えており，社会的に出来事を位置づけて捉えていないことが推察された。さらに，他者とのやりとりがまるでインターネットのチャットであるかのように，羅列的に伝えるだけといったコミュニケーションの特徴がみられた。野村（2006）は，クライエントの語りのプロセスを分析し，“並べる”，“進める”，“遡る”，“省みる”，“留める”という５つの語りの構造を抽出し，“並べる”というプロセスを出来事が並列的に表出され，それらの間の関連付けが希薄な語りであり，主訴から連想される出来事の列挙であると述べている。インターネットのチャットのように羅列的に語るということは，過去の他者と自分との間で起きた出来事や会話などがリアルな体験として自分の中にうまく関連付けできていなかったり，吸収できていないのではないだろうか。

このように，若年無業者のコミュニケーションの構造にはアンバランスさがあるため，ぎこちなくて違和感を感じるコミュニケーション部分について支援する必要があるだろう。

## 2. 若年無業者のコミュニケーションの支援モデル

若年無業者のコミュニケーションがアンバランスであるという構造を踏まえ，コミュニケーションのバランスがよくなるよう若年無業者を支援することが就労へ近づくことにつながるのではないだろうか。本研究で得られた若年無業者のコミュニケーションの構造の知見から支援のモデルを図示した。Fig.2 に示す。

第一に，若年無業者の＜語りの非一貫性・不正確さ＞の特徴からはアイデンティティが未形成であることが考えられる。野村（2002）は自己の語りの構造的特徴とアイデンティティの様態とが関連することを示唆している。また，ライフストーリー上の経験を語る際に，自他に了解できるような一貫した構造を維持できるか否かが，アイデンティティ形成や心理社会的適応などの心的特性に接近する糸口として着目されている（野村，2005）。Angut & Hadtke（1994）は，クライエントとセラピストによってなされる語りのプロセスを見出し，このプロセスによって自己の体系化がなされることを示しており，語りのプロセスからアイデンティティ形成へつながることが考えられるだろう。若年無業者のアイデンティティを形成するために，語りをまとまりのある一貫したものへ，正確なものへ，と支援していくことがアイデンティ

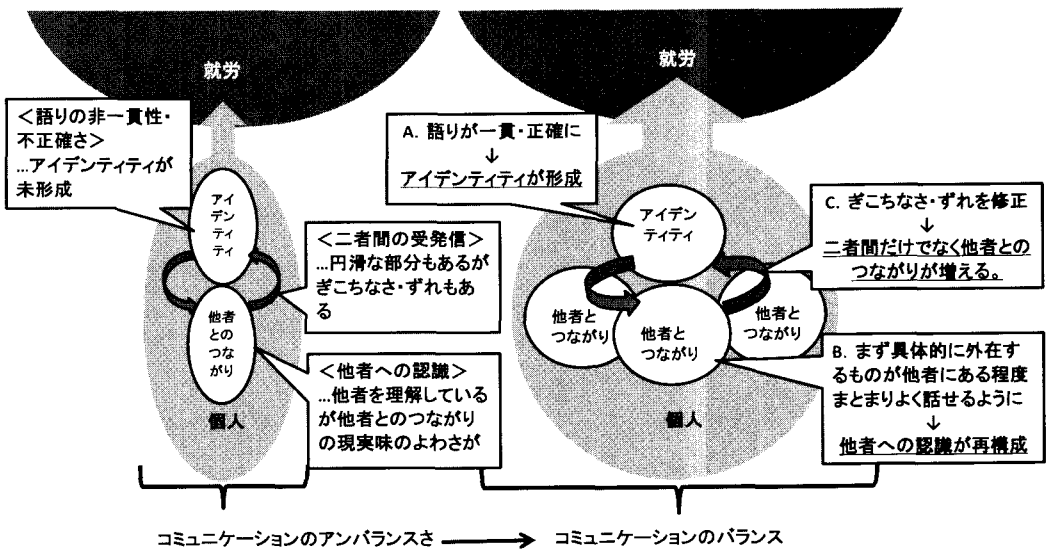


**Fig.2** 若年無業者へのコミュニケーションの特徴と支援のモデル図

ティの形成につながると思われる（図2のA参照）。

第二に，若年無業者の＜他者への認識＞の特徴からは他者への理解はあるもの，他者とのつながりの現実味のよわさがうかがえる。ライフストーリーの最も重要な特質のひとつは，過去の出来事が今ここでの場をとおして語られることでリアリティある過去の出来事がつくられることである（桜井，2006）。しかし，アイデンティティが未形成な状態では，語り手は事実をただ羅列的にはなすしか術がなく，まとまりをもったかたりが成立しにくい可能性が示唆されている（笹倉，2010）。笹倉（2010）は，漫画やアニメについて他者に語るプロセスについて分析した結果から，アイデンティティが未形成なクライエントが自分について語るにあたって，漫画やアニメという具体的に外在するものについてはなしながら，それらとのつながりのなかで自分をかたるという語り方をすることがクライエントのアイデンティティ形成を補うはたらきをもつ可能性を指摘している。そこで，まず具体的に外在するものについて他者に語る機会を増やすことが必要ではないだろうか。具体的に外在するものが他者にある程度まとまりよく話せるようになると，それらとのつながりで自分のこともまとまりをもって語れるようになっていくだろう。その後で，過去の他者との出来事ややりとりもある程度のまとまりをもって語れるようになると，リアルな体験として自分の中に吸収され，自分に自信が持てるようになり，他者への認識も再構成される，という流れが考えられるのではないだろうか（図2のB参照）。

第三に，若年無業者の＜二者間の受発信＞の特徴からは，コミュニケーションが円滑な部分もあるが，ぎこちなさやずれがみられる。若年無業者は青年期，あるいは青年期の延長上にいる。青年期のアイデンティティを形成するきっかけは両親・友人・恋人などの重要な他者との関係性の中にあり，重要な他者との関係性はアイデンティティを形成するために不可欠とされる（杉村，1998）。小此木（2000）は，非精神病性のひきこもりが現代社会に特有な社会心理的な背景をもつことは明らかであり，現代のひきこもりの臨床的な記載はErikson, E. Hのアイデンティティ拡散症候群から始まったと述べている。若年無業者もアイデンティティが未形成であることが考えられるため，重要な他者との間に関係性が築けていない可能性があり，そのことがコミュニケーションの受信や発信にぎこちなさやずれにつながっている可能性が考えられる。そこで，ぎこちなさやずれた語りを修正していくことが，重要な他者との関係をよくしたり，他者とのつながりを増やしていくことにもつながるのではないだろうか（図2のC参照）。

## V 今後の課題

本研究の今後の課題としては，フリーターや就労者と循環する可能性が高い無業期間6ヶ月未満の周辺的な若年無業者との共通点や相違点などの検討があげられる。また，健康面の配慮から面接時間を統一できないため，抽出したエピソード数に幅があるため，エピソード数や分析カテゴリーの妥当性を高めて仮説モデルを精緻化し，実践場面で若年無業者の理解および支援につなげていくことも今後の課題である。

**謝辞**

本研究の調査に快くご協力いただきました参与者の皆様，そして相談機関のセンター長やスタッフの先生方に心よりお礼申し上げます。本論文作成にあたり懇切丁寧なご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生，ピア査読をしていただきました九州大学大学院人間環境学府の山口祐子さんに深く感謝いたします。

## 引用文献

Augus, L. E. & Hadtke, K. K.(1994): Narrative processes in psychotherapy. *Canadian Psychology*, **35**, 190-203.

Blos, P. (1967): The second individuation process of adolescence. Psychoanalytic Study of Child, **22**, 162-186.

Bruner, J. S.(1990)：Acts of meaning. Cambridge, MA：Harvard University Press. 岡本夏木・吉村啓子・中渡一美（訳）(1999)：意味の復権—フォークサイコロジーに向けて— ミネルヴァ書房.

Cohler, B. J., & Cole, T. R. (1996)：Studying older Lives：Reciprocal acts of telling and listening. In J. E. Birren, G. M. kenyon, J. E. Ruth, J. J. F. Schroots & T. Svensson (Eds.), *Aging and biography：Explorations in adult development* (pp.61-76). New York：Springer Publishing Co.

Coleman, J. C. & Hendry, L. B. (1999)：The nature of adolescence. 3rd. ed. London：Routledge. 白井利明（訳）(2003)：青年期の本質 ミネルヴァ書房

玄田有史・曲沼美恵(2004)：ニート—フリーターでもなく失業者でもなく 幻冬舎

Habermas, T., & Bluck, S. (2000): Getting s life：The emergence of the life story in adolescence *Psychological Bulletin*, **126**(5), 748-769.

堀 有喜衣（2004)：無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題 日本労働研究雑誌, **533**, 38-48.

本田由紀・堀田聡子（2006)：若年無業者の実像—経歴・

スキル・意識　日本労働研究雑誌，**556**，92-105.
本田由紀・内藤朝雄・後藤和智（2006）：「ニート」って言うな！　光文社新書
居神　浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑　秀和(2005)：大卒フリーター問題を考える　ミネルヴァ書房
小杉礼子（2003）：フリーターという生き方　勁草書房
小杉礼子（2005）：若年無業・失業・フリーターの増加　小杉礼子（編）フリーターとニート　勁草書房　pp 1-20.
厚生労働省（2003）：10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン―精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか―
厚生労働省（2007a）：平成19年度版労働経済白書
厚生労働省（2007b）：ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究
Krantz, D. L.（1998）：Taming chance：Social science and everyday narrative. *Psychological Inquiry*, **9**, 87-94.
松嶋秀明（2001）：鑑別所という状況に着目した語りの文体分析　青年心理学研究，**13**，1-12.
内閣府（2005）：青少年の就労に関する研究調査報告
野村晴夫（2002）：高齢者の自己語りと自我同一性との関連―語りの構造的整合性・一貫性に着目して―　教育心理学研究，**50**(3)，355-366.
野村晴夫（2005）：構造的一貫性に着目したナラティヴ分析：高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討　発達心理学研究，**16**(2)，109-121.
野村晴夫（2006）：クライエントの語りの構造　心理臨床学研究，**24**(3)，347-357.
沖田敏恵（2004）　ソーシャル・ネットワークと移行．移行の危機にある若者の実像―無業・フリーターへのインタビュー調査　労働政策研究報告書，No.6，186-211.
小此木啓吾（2000）：ひきこもりの社会心理的背景　狩野力八郎・近藤真司（編）　青年のひきこもり―心理社会的背景・病理・治療援助　岩崎学術出版社
斉藤　環（1998）：社会的ひきこもり　PHP研究所
斉藤　環（2007）：ひきこもりはなぜ「治る」のか？―精神分析的アプローチ　中央法規
桜井　厚（2006）：ライフストーリーの社会的文脈　能智正博（編）　＜語り＞と出会う―質的研究の新たな展開に向けて―　ミネルヴァ書房　73-116.
笹倉尚子（2010）：漫画やアニメについて他者に語るプロセス　心理臨床学研究，**28**(1)，16-27.
白井利明（2005）：若者のアイデンティティ形成の支援　上里一郎（監修）　白井利明（編）　迷走する若者のアイデンティティー―フリーター，パラサイト・シングル，ニート，ひきこもり―　ゆまに書房　pp 249-279.
Social Exclusion Unit（1999）：Bridging the Gap―New Opportunities for 16-18year olds not in education, employment or training.
杉村和美（1998）：青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，**9**，45-55.
Young, K. G.（1987）：Taleworlds and Storyrealm：*The phenomenology of narrative*, Nijhoff.